

---

# 寂しい家族

まったりorz

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

寂しい家族

### 【Nコード】

N1344B

### 【作者名】

まつたりorz

### 【あらすじ】

愛情がわからない私とその幼少時代。大人になった私が両親に抱いた新しい感情。

例えば、

例えば、愛する人に否定されたり、傷付けられたりしたら、私は生きてゆく事が出来るだろうか。

「俺の事、好きじゃないんだろ？」

そう言って去っていった男の背を見つめるのは、何回目だろうか。手を伸ばせば、届く位置にある感情に、手を伸ばす事はない。欲しがってなど、いないから。

母親の涙が苦手だった。

よく、怒る人だったが、たまに手の付けようがないようなヒステリーを起こした。

よく、叩かれたし、怒鳴られた。

その原因は、私自身の過失なのかもしれないが、納得のいかないものだった。

「誰のせいでこんな目にあってると思ってるんよっ。触るな、あっち行ってなさいっ。」

幼稚園の頃、二階で膝を抱えて泣いていた母の肩に触れた手は、撥ね退けられた。

あの頃の私は、何を考え母に触れたのか、今ではもう、思い出せないけど。

そして、決まって、そのヒステリーが治まると、異常なほど優しく接されるのだ。

何事もなかったかのように、私に笑いかけ、私を抱く温かい腕。

そういうものなんだろう。

私は、冷めたような、甘えたような気持ちで、ぼんやりと悟った。

私は、父親が嫌いだった。

偏屈で横暴で暴力を振るうし、性的な嫌がらせも多少あった。

「勉強しろ、いい成績を残せ。そんなんじゃ社会に出てもやってゆけない。」

父は、私の事を、「自分の娘」という存在としてしか認識できない人だった。

「私自身」という存在を、見ようとしなかった。

私は次第に、父を絶対的な存在というより、ただの浅はかで愚かな大人としてしか思えな

くなっていった。そして、それと同時に反抗的になった。

反抗的な態度をとると、父は母親を責めた。

「お前のしつけが悪い。お前に似たんだ。」

そして、母親は私を怒る。

私のせいで、母親に嫌な思いをさせたのは、事実だけど、私は何だか納得が行かなかった。

「私は、お母さんには何にもしてないのに。」

そう考えると、悔しくなって、いつも泣いていた。

いつだって、不満の行き着く先は、私なのだ。

暴力や怒りは、私に行き着いて、終わる。

そして時間がたてば、また、甘いお菓子や、綺麗なりボンや、優しい抱擁が待っているのだ。

それが、私には余計苦しくなった。

そんなものは、愛情じゃない。私を手酷く叱った罪悪感を消すためにやっている事だ。

「お母さんだって、辛いんだから。」

分かってる。

だから余計わからない。

私は、一体何なの??

子供の頃からの繰り返し返す日常に、答えも見出せないまま、高校生になっただけだ。

「じゃあ死ねばいいでしょ!」

両親とのケンカの報復として、断食をしていた私に母親が叫んだ。

「働かざる者食うべからず。誰のおかげで飯が食えると思ってんだ。」

断食のきっかけは父親の言葉だった。

食うなと言われ、食べなければ死ねと言われたわけだ。

私は、どっちを取っても怒られるらしい。

「じゃあ、何で産んだんだよ!」

思わず、興奮して泣きながら叫んだセリフに返答はなかった。

バカらしい。

冷静になってから、後悔した。

何も、

「私を」

産みたくて産んだわけじゃないだろうに。

単に

「子供」

を作るためにセックスして受精して出来た一体の

「子供」

と言うものが、何を言ってんだか。

愛情って何？

私が受けた全てのものは、愛情なのだろうか。

私が、父親と母親に持った感情は愛情なのだろうか。

だとすれば、矛盾だらけのものだ。

付き合った男は、皆、私に愛情を求めた。

私には与え方は分からない。

愛され方も。

私にとって愛される事にはいつも、苦痛を伴っていたから。

私はもう

「子供」

では、なくなった。

両親に過剰な期待をすることも、理想を押しつけることもしなくなった。

「愛情」なんて幻想は信じない。私は子供じゃないんだから。生まれ育った家を出て、私はもう、母が私を産んだ歳になった。

母親は、白髪が増えた。

父親は、糖尿病で痩せて昔ほどの威圧感はなくなった。

私は、たまに実家に顔を出して、たまらない気持ちになる。

子供の居なくなったこの家で、決して仲の良くない父と母は何をして過ごすのだろう。

家のあちこちにはまだ、子供の頃の名残が残っているのに。

ゲームセンターで取ってもらったぬいぐるみや、もうやらなくなったテレビゲームや、学生時代の教科書や、成人式の写真、それらは全て、静かに存在したままで。

最近、母親は夕食を作らず、買ってきた惣菜で済ましているようだ。そして父親は、会社の同僚と頻繁にスナックに行くようになったらしい。

二人とも寂しいのだ。

二人ともどうしようもなく寂しい人間なのだ。

そして、今なお、私は素直に、甘える事も孝行することも出来ない。  
私も寂しい人間なのだ。

愛情は未だに理解出来ないし、幼い頃の私が傷付かなかったわけでもない。

ただ、それでも、この二人の寂しい親を見ると、たまらなく切ない気持ちにならずにはいられないのだ。

幸せを願わずにはいられないのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1344b/>

---

寂しい家族

2010年11月2日21時16分発行